（要約版）

オランダのコーヒー文化に関する会計史的研究
－なぜコーヒーが選ばれたのか？－

橋本　武久（京都産業大学経営学部）

1. 研究目的

オランダ東インド会社（1602-1799）の収益の源泉が，香辛料貿易にあったことはよく知られているが，同社は嗜好品も多く扱っていた。それらは東南アジアのコーヒーや，イラン・南アフリカのワインなどである。しかし，この嗜好品貿易については，文化史的な観点からは相当数の研究があるものの，その取引の会計・商業的な実態についてはほとんど分析されてこなかった。そこで本研究では，オランダ東インド会社による嗜好品貿易がどのような規模で行われ，当時の社会・経済にどのような影響を与えたのかについて，会計学的一次料史資料の精査を通して，その実態を実証的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究助成申請当時の当初計画は，次のようなものであった。

① 文化史や貿易史などの周辺分野の先行研究成果（論文等）の収集。

② コーヒーに関するあらゆる先行研究のデータベース化と内容の検討。そして，それらの意義と限界を措定し，本研究の課題のブラッシュアップを行った上で，追加的に収集が必要な資料を特定する。

③ 研究の遂行に必要な追加の資料の収集。

④ 追加資料を基に本研究課題に対する検討を行う。

⑤ 成果報告書の作成を行い，本研究の結論，ならびに今後の展望を明らかにする。

3. 研究成果

前述の通りコロナ禍の影響を受け，現地での調査が行えない中，文献研究やオンラインで閲覧やダウンロードが可能な資料をもとに以下のような様な研究成果を得た。

① オランダ共和国成立以降の同国経済おけるコーヒーの位置づけ

② オランダ東インド会社における商品（嗜好品）としてのコーヒーの重要性

③ 会計史的観点から見たコーヒー：オランダ簿記書の検討

4. 考察

① オランダ東インド会社の取扱商品が，17 世紀前半におけるもっとも重要な商品で

あった胡椒から，早くも 17 世紀後半にはその他の香辛料に追い抜かれ，さらに後発の産品であるコーヒーや茶が大きくその割合を伸ばすとともに,繊維類が最大の取扱商品となるなど,同社の取扱品が,奢侈品から嗜好品や日常品へと変化していった。

② もっとも栄えた地場産業の一つであったビール醸造業は，18 世紀後半には重い消費税率のために生産高が急激に減少し,その一方で税率の低かったコーヒーと茶の価格は急落したため，コーヒーは奢侈品から嗜好品へと変化を遂げていった。

③ 社会経済的背景の変化とともに,そこに生起する記録計算上の要請を反映する簿記書においても，例示される商品勘定は，胡椒などの奢侈品から，コーヒーなど嗜好品へと移行し，18 世紀の簿記書では胡椒などに完全に取って代わった。

5. 結論（今後の課題と展望）

奢侈品であったコーヒーが輸入の拡大と税制の優遇もあって，オランダ人にとってビールに替わる嗜好品としての地位を固めることができた確認した。これを，会計史的観点から位置づければ，より合理的な会計処理法として，中世以来のヴェネツィア式簿記の特徴の一つをなす特定商品勘定から，近代的な一般商品勘定へと商品勘定の総括化が時代とともに進む中において，コーヒー勘定などについては，一般商品勘定と特定商品勘定を並行的に条件付きで使用することを認めていることは，それだけこの商品に重要性があり，またそれを例外的に記帳することに意義があったことを示していると考えられるのである。

このことは，会計史的にみて，その記録の対象が奢侈品からコーヒーなどの嗜好品へと移ったことを意味し，帳簿記録が，主として一部の特権階級が享受する奢侈品を記録するものではなく，一般大衆が日常生活において楽しむための嗜好品を記録するものに変化したという意味において，それを会計資料の大衆化と呼ぶことも可能かもしれない。

しかしながら，このことは仮説にすぎず，これを証明するためには，今回，十分に検討することができなかったワインなどその他の重要な嗜好品についても，一次資料を基に比較検討することが必須であり，これが本研究テーマの今後の課題となる。